

— NO205 2月号

FOREST NEWS

未来を守る木を植える
未来を育てる木を植える



2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携

NPO法人 地球の緑を守る会

発行人 藤生輝彦

〒182-0021東京都調布市調布ヶ丘2-15-1ビリアベルデ407号

Tel:042-449-0183

ホームページ <http://midori.mond.jp/>



理事長メッセージ

パンタナールの象徴 トウユウ

宮脇方式でパンタナールに初の自然林を！

パンタナールの南西端であるレダ地域の植生調査は、当法人により2007年までに行われ、すでに結果が出ています。それによると、レダの土地の潜在自然植生(その土地本来の定着樹種)は、ケブラッチョ、バロサント、バロボラーチョ、パラトード、ラパーチョ、アルガロボが主木です。これらの親木から種を採取しポット苗を作り、できる限り多くの種類を混植・密植することで自然林の再生が可能です。1㎡当たり平均3本です。

レダは牧場跡として長年放置されていた場所で、土壌が大変痩せており、自然林を再生しないかぎり現在の半砂漠状態がいつまでも続くこととなります。レダでは従来ニームを多く植えてきました。この木は乾燥した痩せた土地でもよく育ち、薬効成分があるので有用樹として世界中の亜熱帯、熱帯地域に植えられています。

しかし、ニームは和名をインドセンダンといい、インドが原産であるため一時的な

緑化には便利ですが、レダ地域では長持ちしません。冒頭にあげた6種はすべて高木ですが、亜高木や低木は野鳥や小動物が運んでくるため、やがては多層群落を形成します。草本層(下草)は野生のバイナップルやサボテンです。

宮脇方式とは「その土地本来の種類を苗木の段階から混植・密植し、自然林を再生するノウハウ」です。具体的には

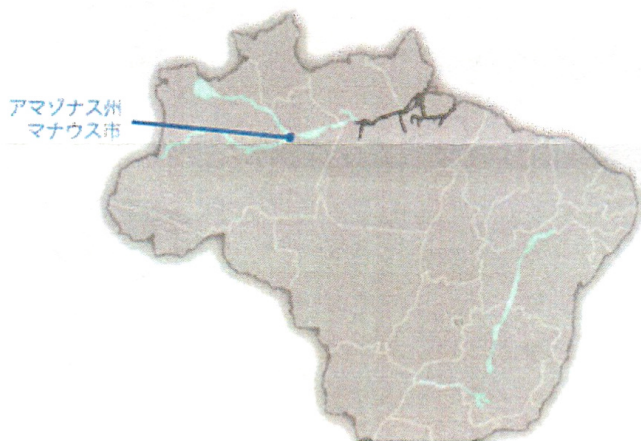
- ①植える種類を間違えない
- ②できる限り多くの種類を混ぜて植える
- ③通気性、通水性を持たせた植栽マウンドを作る(特にレダ現地の土地はほぼ100%粘土質なのでそのまま植えても根付かない)
- ④最後の作業として、乾燥を防ぐため地面が見えなくなるまで稲わらや干し草などで覆う。

の手順で進めていきます。

これまでの土台の上で生態系再生の森のモデルを創っていく年としましょう。

ブラジルマナウスにてアマゾン川流域植樹活動を計画

アマゾン川最大の支流に位置するブラジルのアマゾナス州の州都マナウスは、多様で貴重な自然環境があり、多くの国立公園や保護区が隣接している一方、急速な都市の拡大により自然環境が喪失しています。熱帯林の急速な破壊や劣化による生物多様性の大規模な喪失をいかにくい止め、地域社会の持続可能な発展を図るかが、地球規模の緊急課題となっています。



2026年潜在自然植生の植樹活動を計画

ブラジルのマナウスで潜在自然植生の植樹を行うことは、地域環境や社会に多大な恩恵をもたらす重要な取り組みです。まず第一に、植樹は生物多様性の保全に寄与します。アマゾン熱帯雨林は世界で最も多様性に富んだエコシステムの一つであり、多くの固有種が生息しています。潜在自然植生の復元によって、これらの種が生息する適切な環境を提供し、絶滅の危機に瀕している生物を守ることができます。

さらに、植樹活動は気候変動の緩和にも貢献します。木々は二酸化炭素を吸収し、酸素を放出するため、温室効果ガスの削減に役立ちます。アマゾン熱帯雨林は「地球の肺」とも呼ばれるほど重要な役割を果たしており、その保全は地球規模での気候安定に直結します。

また、植樹による森林再生は水質の改善や土壌の保護にもつながります。森林は雨水の浸透を助け、洪水のリスクを軽減し、土壌の侵食を防ぐ役割を果たします。これにより、地域住民の生活環境が向上し、農業生産性が維持されます。

さらに、植樹活動は地域経済の発展にも寄与します。植樹プロジェクトには多くの労働力が必要とされ、地元住民に雇用機会を提供します。また、エコツーリズムの促進により、持続可能な観光業が発展し、地域の経済が活性化します。

以上のように、マナウスでの潜在自然植生の植樹は、生態系の保護、気候変動の緩和、水質・土壌の改善、地域経済の発展といった多岐にわたるメリットをもたらします。この取り組みは、未来の世代に豊かな自然環境を残すための重要な一歩です。



マナウスの街並み

2025年は現地調査を実施予定

世界の肺といわれるアマゾンとパンタナールにおいて、宮脇式の植樹活動を行うことは、我が法人の悲願です。2025年6月には奉仕団を派遣、パンタナールのLedaでの植樹活動を通じて、地球環境の改善と生物多様性の保全に貢献します。8月にはブラジルのマナウスを訪問、宮脇式植樹活動を行うための現地調査を実施、ここでは、協力団体であるブラジルYSPとの打ち合わせを予定しており、植樹活動の具体的な計画を立てます。

26年の植樹活動のために予定地を決定し、植樹の規模や潜在自然植生の選定、苗木の確保についても検討し、持続可能な植樹活動を実現するための準備を行います。

この一連の活動を通じて、地域の環境改善に寄与し、地球全体の持続可能な未来に向けて一歩を踏み出すことを目指しています。

船橋支部の河原支部長にお話を聞きました

植樹活動をするきっかけ

2011年の東日本大震災の際、私の仕事仲間が営業で石巻市と仙台にいたとき2人が命を落としました。また、自分はその時、浦安を回っていた際に液状化現象に遭遇し、災害に対する考え方が変わりました。それから暫くして2016年に、小学生の子どもたちの面倒を見ていた時期があり、教育のために当法人の高津理事長を一度呼びして子どもたちと一緒に森の大切さを学ぶ機会を持ちました。

高津先生の話で、自然の力を利用した防災の重要性、津波で甚大な被害を受ける地域と、被害がほとんどなかった地域の違いを学び、自然の力で対策をしていく必要性を強く感じて植樹活動を始めるきっかけになりました。



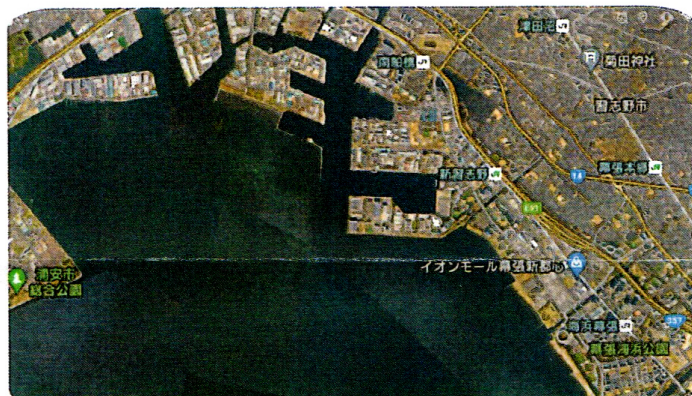
岩手県大槌町の津波

船橋市で植樹活動を始める

震災後に参加した植樹活動で宮脇昭先生が市民と一緒に植樹した宮脇方式の森が美しかったのがとても印象的でした。そこで、船橋市でも同様の取り組みができないかと考え、2019年から浦安の海沿いで他団体が企画している植樹活動に参加しながら、船橋市での植樹活動を模索し始めました。

しかし、行政との連携や時間の確保が課題でした。市の行政は腰が重く、植樹場所の確保が難しいと感じました。

そんな中で、浦安市弁天公園で混植密植の植樹を一年を通して体験できる企画を行っていた「ふれあいの森公園を育む会」の後藤さんとお会いすることができました。



船橋市は東京湾の奥まった部分に位置しているため、津波が襲った場合にその高さが最大になる可能性があると言われている。この地域は津波に対する防災対策が重要

船橋市は日本で人口が多い街ですが、特色が少ないと感じます。海沿いの地域で宮脇方式を取り入れた森作りを進め、津波に対する防災効果を高めることができるのではないかと考えています。若い子どもたちや学生さんと一緒に、誰もが癒されるような自然の森作りを目指して活動が続けていきたいと思っています。

さらに、地域住民の皆さんにも参加していただき、コミュニティ全体で森作りを推進することで、地域の絆を深めることができると信じています。自然環境の保護と防災の両面で効果を発揮するこの取り組みを通じて、船橋市がより魅力的で安全な街になることを目指しています。



千葉での植樹活動の様子